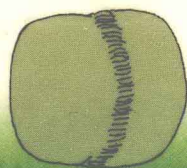


私本・源氏物語
田辺聖子



私本・源氏物語
田辺聖子

実業之日本社

私本・源氏物語

一九八〇年一月二十五日 初版発行

一九八一年七月 十日 二版発行

著者 田辺 聖子

発行者 増田 義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

電話 ○三(五六二)二〇五一(編集)
○三(五三五)四四四一(販売)

振替 東京一―三二六 千一〇四

支局 大阪市北区曽根崎二丁目十二―七

梅田第一ビル内

電話 ○六(三一二)一五七三

印刷所 東京研文社

製本所 共 文 堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

© S. Tanabe 0093-502371-3214

私本・源氏物語／目次

何とも夕顔なき恋の始末の巻	5
北山のすずめこの巻	33
雪の朝の丸太ん棒の巻	61
森の下草老いぬればの巻	95
おぼろ頭の春の夜の巻	127
色けの花は散り散りの里の巻	159
六条のオバハンの巻	193
夜あかし潮汲みの巻	225

装帧·装画／岡田嘉夫

私本・源氏物語

何とも夕顔なき恋の始末の巻

今夜、またぞろウチの大将は、

「出かける」

といひ出した。

宮中から退出して、ここ二条の自邸におちついたのは酉の刻（午後六時）ばかりである。夏の暑い一日もやっと暮れて、これから涼風も立つという頃おい、自分もホッとして久しぶりに老妻の顔を見にいこうかと、手足を水で洗っていたところだ。

そこへ、惟光が来た。

「おいおい、何しとんねん、お出かけやで。早よ、用意せんかい、伴男」

「えっ。今からでっか」

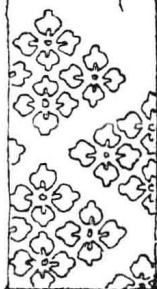
「あたり前や。早よ準備してんか、すぐ出るいうてはんで。せきまえてたのむ」

やれやれ。

またか。

「どこへお出かけです？」

ウチの大将、イヤイヤ
三條へ出まくの図



「三条や」

「ハハア」

三条とは、ウチの大将の舅の邸をさす。

そこには、大将の正室、嫡妻がいらつしゃる。舅は左大臣さまである。

ウチの大将は、左大臣の婿、というわけで、この邸へいくと、大将は下にもおかず、鄭重にとり扱われる。だからウチの大将は、ここを常住の邸にするのが本当なのに、どうも、ここには居りづらいとみえ、自分のものとして別持っている、二条の邸にばかり帰りがたがる。

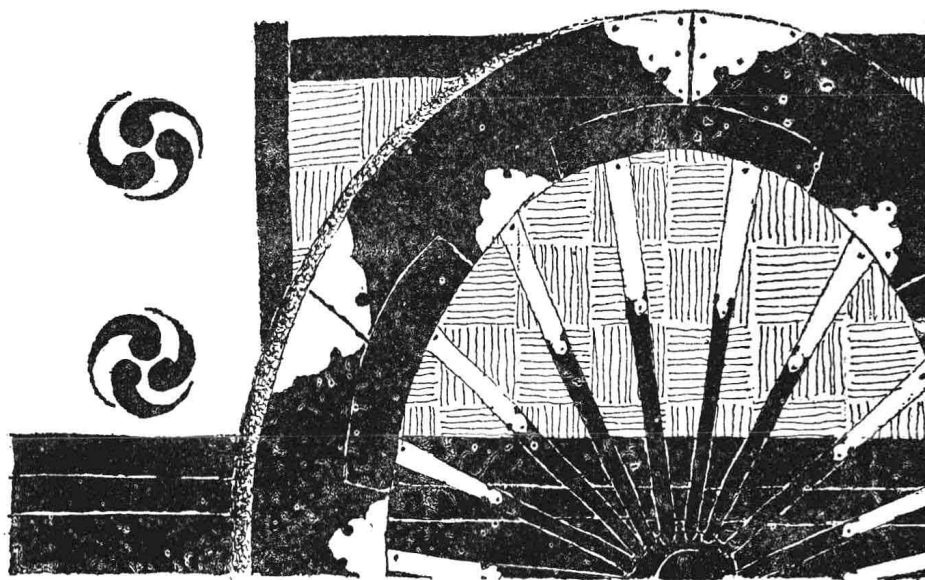
しかし、あんまり妻の家へ顔出ししないのも不義理だというように、折々はいく。

折々はいくが、やはり、御所からの帰りに寄る、というような、気軽な寄りかたはできないらしい。

必ず自分の邸で一息入れて、ホッと氣をとり直してから、

(さア、いこか)

と自分で自分にかけ声して、妻のもとへいくらしい。



べつにウチの大將がそんな胸中をくまなく打ちあけたわけではないが、長いことお仕えしているから、身分卑しい下部しもべの自分にも想像はつく。自分は小舎人ことねりとよばれる雑仕ざうし、名は伴男、大將のご信頼も頂いている。

ウチの大將の一ばんのご側近は、惟光これみつというはしっこい男である。惟光は、大將の乳兄弟でもあり、すでに五位の位も頂いている身分である。

ついでにいうと、我々下部仲間や、側近の惟光との間では内々、ひそかに、

(ウチの大將)

と呼んでいる公達きんだちは、実際の官位は、三位みの中將で、まだ、役目としては大將ではない。

ここでいう(ウチの大將)は、(ウチの親分)という風な意味で使っているのである。

おん年は十七歳。

花の如き美貌の貴公子であられる。

おまけにバックがすごい。

舅は左大臣で、おとつあんは時の帝みかどでいられる。帝のご秘蔵っ子で、目に入れてもいたくない方なのだ。状況がゆるせば、皇太子にもなっていられしたかもしれない、という大変なシロモノ。いろいろなうるさいので、臣籍降下して、源の姓をたまわった。

そういう、天下一級の貴公子である。おまけに色男ときてるので、女にもててしかたがない。

いろいろ行くところが多い。

正式に出るとなると、馬に乗って武装したお供を引き連れていたりして物々しく目立つので、そういうのは御所への参内とか、三条の大臣さまの邸へいくとき。お忍びの時は我々小舎人数人、側近数人で、こそこそと、やつした牛車で出かけられる。

我々は、お忍びの時も、正式の時も、お供せねばならない。

ウチの大将は若いから、よる夜中でも、鶴の一声、

(出かける)

といった出るが、こちとら、自分の如く四十すぎの人間は、やれやれ、またか、と思ってしま
う。

しかし、

(眠たいよって、かんにんしとくはなはれ)

というわけにもいかない。自分は、イナゴ丸や、小鷹、大虎、といった舎人たちを監督する立
場にあるのだ。

それに、ウチの大将のゆく先々についてゆくので、私生活を全部知っている、そういう役目
を、誰にでもかわってもらうわけにはいかない。

「伴男はかならずついてこいよ」

と惟光に頼られているのだ。というのは、この惟光、主人に似て色男のはしくれで、あちこち
通う女がおり、時々ひよいと蒸発し、無責任なことをするからである。

そんな風に女にもて、あちこち忙しく通うウチの大将が、三条の正室の邸には腰が重いの
だ。サァいこか、とおのれでおのれを叱咤して出かけないといけない、そんなところが何とも自
分には、可哀そうな気がする。

よっぽど気が合わないんだらうなあ。

我々庶民であると、そういう妻ならさっさと手を切る所であるが、身分が重いとわがまま勝手
はゆるされない。

貴族は不自由なものであるのだ。

ウチの大將は、若さと美貌と、富と権力に奢って、何でも好き放題にしているようであるが、しかし、あんがい、そうとばかりいえないのである。

そこへくると、

（オレなどは、かなりしたいことしてるのん、ちゃうかな）

と思う。

しかもこの年でさえ、まだ、

（してきた）

と過去形になってない所が我ながらすごい。

自分は水漬け飯を、瓜の塩漬けであわててかきこみ、中庭へ出た。すでにもう牛飼童の雉子丸が、牛の首に車の轆なぐさの先の、轆くびきをかけようとしているところだった。これは十七、八の少年である。

イナゴ丸はシャレ男であって、どこか女のもとへ出かけるつもりだったのか、着物を着更えていたが、

「大將の悪いクセやな。御所の帰りに廻ってくれたら手間ひまからへんのに」とぼやいていた。

みんな、ぶうぶうとむくれていた。

「いったい、どこへいきまんね？」

「三条のお邸や。向うで泊りになるやろ。三条は食いもんもたっぶり出て、お手当ても頂けるやないか」

自分がいうと、頓とんにみんなの機嫌がなおった。

三条邸には、執事に気の利いた人間がいるとみえて、ウチの大將が行くと、一行の従者に惜し

げもなく物をほどこすので評判がよい。

のみならず、こんな冗談をいう。

「よろしか。あんたらな、なるべく殿さんに、ウチの邸へ来てもらうようにそのかしてや。よそのオナゴはんのとこへいく、いわはったかて、聞きまちがえたふりをして、ここへお連れしてや。そうすると、御方さまもお喜び、大臣さまもお喜び、それであんたらにもお手当が出て、あんたらもお喜び、という寸法や」

こういう風で、帰りには酒や布や餅米やと土産までもらえるので、左大臣邸へいく、といえは夜よ中でも、みんなはわりに文句はいわない。

大臣も親らしく、娘のために氣を使うのであるらしかった。

牛車^{ぎしや}が仕立てられた。これも大臣家からの贈り物の、「角白^{かくはく}」という名牛、骨太の四肢の頑丈な、角の長い、大きなりっぱな御厨牛である。

ウチの大將が乗りこむ。すらりとした体つきに、顔はツルリと、カラをむいた卵のよう、卵に目鼻という顔立。

「ウチの大將、夏^{なつ}痩^{やせ}せしてはんの、ちゃいまっか」

と大虎が、松明^{たいまつ}の用意をしながら、ぬすみ見ていう。

「ちょっと、過ぎるのとちゃいますか」

イナゴ丸^{いなごまる}が、けったくそ悪^{わる}そうに呟^{つぶや}いた。

「何が過ぎるねん」

「まあ、よろしけど」

暗くなって大臣邸に着く。灯がついていて門はあけられてあり、庭の池の水音も涼しく、さすがに当代一の権勢家の大邸宅である。

下人用の部屋でみんながくつろぐ間もなく、奥の方からざわめきがひろまって、惟光がそく
さと、

「方違えや。紀の守の邸へお出かけや」

と自分呼びにきた。

「何のこっちゃい」

方違えというのは、陰陽道でいう、方角がわるいので、避けることである。今夜、ウチの大將
は、暦によればこちらの邸は方角が悪いのだ。それでまた避けてどこかへ行かねばならぬとい
う。やれやれ。

「早よしてや。せきまえでたのむ」

と惟光はいそがす。

それで自分には分った。

大將は、はじめから今夜、この三条邸が、鬼門に当ることを知っていたのだ。それでいてうっ
かり忘れていた、というふうにしてやってくる、方違えに出ねばならないと教えられる、

「何や、せっかく来たのにもう面倒やから出ていきとうない」

などと大將はいつてみせ、そこは古風な大臣あたりが、

「いや、そんなことなさっては縁起がわるうございます」

と、どこかへ方違えにゆくよう、せかして立たせる。こうなると、しぶしぶ家を出ていける。
顔を出したというので義理も済み、かつ、大っぴらにヨソで泊れるのだ。内心、ヤレヤレ、これ
であの気位たかい、ブッてる女のそばに一晩いなくてすんだと思ってるにちがいない。大將はか
なり小デエの働く男である。尤も、色ごと師というのは、こういう気持がマメでなければだめ
あろう。

「この夜中に、また、出まんのか」

と小鷹たちがむくれ返っていた。

「寝る間もあれへん。こんどはどこへいきまんねん」

「紀の守の邸やそうな。方違えやから、ウチの大將も、おとなしィに寝よるやろ」

「ほんまかいな」

みんなもう、やけくそようになって出発する。雉子丸などは、牛のそばについて歩きながら、居眠りし、惟光も馬上で欠伸していた。

二

月はかなり傾むき、風は涼しい。紀の守の邸では知らせを受けて、光榮なことだと喜んでまち構えていた。

イナゴ丸たちは、大將が邸内へ入るや否や、片づけて寝に入ってしまった。近頃の若い者は、言いつけられたことだけやとす。どうかして手足を動かすまいとする。そして文句だけは一人前である。

自分は念のために勾欄の下に坐って控えていた。紀の守の家族であろうか、女の姿が御簾みすだの向うにちらちらして、灯をもって廊下をわたってゆくのがみえる。

あれを見たら、ウチの大將はじっとしていないだろうなあ、と思っていたら案の定、

「おい、伴男」

と、惟光がひそかに呼ぶ。

「どういふ女たちか、探ってこい。ついでに美人かどうかも探ってこい、と殿の仰せや」

「よろしおま」

「おつきの女房は何人ぐらい、いたはんのか、そのへんのところもよろしくたのむ」

いや、もう、大将ときたら全く、一晚としてゆっくり手足をのばして寝てない。いつもちよこまかとマメに動く。若いのお。

自分は下屋の水仕女のたまりへ話を聞き出しに行く。自分のように中年の、くすんだ男には、女は話しやすいとみえて、やっぱり中年の水仕女が、気やすくいろんなことを聞かせてくれた。そのついでにふと、

「下屋で寝るの？ あそこは暑いわよ、蚊もくるし。あんたとこの若い人、みんなどっか涼しいところで寝場所さがしてゐたい。あんたもここで寝たら？」

と冗談をいった。

「大きに。都合で寄せてもらいます」

冗談とも本気ともつかずいうと、

「ご主人に似て、あんたもいい男ね」

とお愛想をいつてくれた。

水仕女は三十五、六の、いい体格の中年女である。顔立ちは美しくも醜くもないが、見安い顔である。

そして、率直そうで、人がよさそうだ。それが一ばんいい。美しい、というより、いい表情をしている。労働で鍛えこんだ、というがちりした体格で、そこもいい。小袖に褶をつけていて、背は、ちゃんと伸びている。

これはきつと、水桶や荷物をあたまへ載せて運ぶからだろう。

「……ええおっぱいやなあ」